新任福祉・介護施設等職員合同交流・研修会 秋

横浜会場 日程 令和元年 11月8日(金)
会場：神奈川県社会福祉会館

海老名会場 日程 令和元年 12月6日(金)
会場：海老名市文化会館

新任職員が仕事のやりがいや次年度に向けた目標づくりを行い、仲間同士の交流を通じて、自身のキャリアデザインを再確認する場とすることを目的に開催しました。

Program

1 開会挨拶
神奈川県社会福祉協議会　かながわ福祉人材研修センター

2 グループワーク①
テーマ1「現場の体験で嬉しかったこと、楽しかったこと」、テーマ2「困ったこと、嫌だったこと」

3 先輩職員による体験レポート

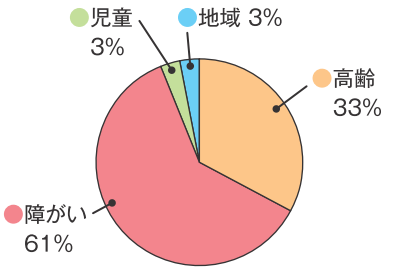
■横浜会場
【子ども】社会福祉法人白百合会
第二白百合乳児保育園 杉本 沙矢香さん
【障がい】社会福祉法人同愛会
リエゾン笠間 西沢 杏奈さん
【高　齢】社会福祉法人セイワ
介護老人福祉施設すみよし 高橋 遼さん

■海老名会場
【子ども】社会福祉法人大原福祉会
大原保育園 萩原 美貴さん
【障がい】社会福祉法人ひばり
ハートピア湘南 小林 竜也さん
【高　齢】社会福祉法人蒼生会
特別養護老人ホームモモ 碇谷 篤志さん

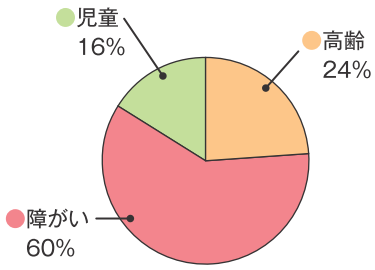
4 講義 支援とはなにか―福祉サービスの特徴と専門職の役割
講師：神奈川県立保健福祉大学講師 岸川 学氏

5 グループワーク②
「明日の実践に生かす小さな目標づくり」

横浜会場：36名（分野別内訳）



海老名会場：45名（分野別内訳）



グループワーク① 「現場体験の嬉しかったこと、困ったこと」

仕事を始める前の福祉の仕事や利用者支援のイメージは、それぞれ違いがあり、実際に働いてみてのギャップに悩みながら、自分らしい支援を模索しています。

グループワーク①では、これまでの現場体験から「嬉しかったこと、困ったこと」をテーマに自分の中で振り返りを行い、グループ内で共有をしました。ワークを通じて、初任の時期から支援者としての自分の感情を吟味し、より良い利用者との支援関係を作れるヒントを学び合います。

また、事業所によって、新任職員が職場で少なく、仕事への悩みや楽しさの共有が難しいこともあり、ピア（仲間）として共感することを通じて、参加者が改めて、仕事への醍醐味や奥深さを確認する時間にもなりました。

Voice ―受講者の声―

- 初めてで自信もないのに、先輩や利用者の方に認められたことが喜びでした。
- 分野は違っても人対人の仕事での喜びや悩みは似ていて、共感できた。
- 相手から共感されて、自分でも気づいていない喜びを知ることができました。

先輩職員からの体験レポート　横浜会場

（福）白百合会
第二白百合乳児保育園　杉本 沙矢香さん

子どもが私を育ててくれた

入職時の私にとって「先生」という言葉が本当に嬉しかったです。この仕事をするにあたっての責任感やこれからの期待を感じる言葉でした。これから経験や学びを深めて、子どもだけでなく、保護者の思いに気づき丁寧な関わりができる保育者になりたいと思っています。

（福）同愛会
リエゾン笠間　西沢 杏奈さん

小さな感謝を心の糧に

利用者の方の些細な動きを見逃さず、どのように理解していくかを私達はつねに考えて仕事をしていかなくてはならないと思います。利用者の方との関わりの中で、小さな感謝を大切にし、自分の糧にして吸収していけているから、楽しく仕事を続けられています。

（福）セイワ
介護老人福祉施設すみよし　高橋　遼さん

つながりが財産

この仕事での一番の財産は人のつながりです。支援が上手くいかない時には、組織を超えてチームアプローチしていく、これがもっとも楽しい部分で醍醐味です。一人で考えられないことでも仲間とだったら乗り越えられるのではないかという気がしています。

グループワーク② 「明日の実践に生かす小さな目標づくり」

福祉従事者として、利用者との関わりを通じて、自身の専門性の確認や今後の課題を見つめ、自身が主体的に専門職としてキャリアデザインを考えていくことは、サービスの質の向上にもつながります。これは、専門職としての経験年数に関わることなく、大事な視点です。

グループワーク②では、新任であるこの時期から福祉従事者としての姿勢を持つことを目的に、キャリアデザインを自身でまとめ、お互いに発表しあい、グループ内で共有しました。

職場から離れ、専門職としての自分の率直な目標を確認し合うことで、仕事に対する姿勢を再確認することができます。大きな目標としてではなく、仕事をする上で、「明日からできる小さな目標」を大事にし、2年目に向けて自信を持つ機会となりました。

Voice ―受講者の声―

- 忙しい時でも利用者の方の声を受け止める支援者になりたいと思いました。
- 皆の目標を聞き、似ている部分や違いも分かり、自分の目標を確認することができ、モチベーションがあがりました。
- 毎日、必死に仕事をしていましたが、自分のことを見つめる機会になりました。

先輩職員からの体験レポート　海老名会場

（福）大原福祉会
大原保育園　　萩原 美貴さん

子どもの良さを見出す

保育士として心がけている事は、感謝をすること、子どもたちに愛情を注いで気持ちを引き出してあげることです。保育は正解がなく、奥が深い仕事です。常に感謝の気持ちをもって子どもの良さを見つけることが良い支援につながると考えています。

（福）ひばり
ハートピア湘南　　小林　竜也さん

失敗を恐れない

みなさんも利用者の方と生活する中で、利用者の方の想いが実現できた瞬間に立ち会う喜びが必ずあります。それを誇りに思える自分がいることは、なによりも良いことです。2年目に向けて、失敗を恐れない気持ちを大切にしてほしいです。

（福）蒼生会
特別養護老人ホームモモ　　碇谷 篤志さん

ケアの根拠を知り、自分の支援方法を見つける

利用者の方との対人関係で難しいと感じたときは、上手にケアをしている先輩職員の真似をするだけで違います。仕事で分からない事は先輩に遠慮なく聞いて、ケアの根拠を知り、自分に合う支援方法を見つけてみてください。

講　義　支援とはなにか―福祉サービスの特徴と専門職の役割

神奈川県立保健福祉大学
講　師　岸川　学氏

利用者の行動の背景を知り、利用者から教えてもらう

私は大学を出て知的障がいを伴う自閉症者を支援する通所施設に就職をしました。自信満々で入職したのですが、利用者のいわゆる「問題行動」に向き合うことで疲弊し、一年目の夏に燃え尽きました。その後は低空飛行が続きました。それでも様々な研修に参加することで外部の人との交流や深い学びの機会を得て、気持ちが前向きになったと感じています。実践場面では「いかに」利用者の問題行動を止めるのかではなく、「なぜ」問題行動が起こるのかを考えながら関わる視点にシフトしました。そして自閉症や知的障がいのある人から教えてもらう謙虚な姿勢を持つこと、うまくできなくても何とかなるというおおらかな気持ちを持つこと、こうして私の気持ちは楽になったと思います。実践を積み重ねる中で知的障がいや自閉症の人々が本来持っている力を発揮し、活き活きと生活する姿を目の当たりにしました。どんなに障がいが重くても社会の一員として期待されること、役割を担うこと、働くこと、地域社会に貢献すること、街に出て暮らしを楽しむこと、これらの大切さを教えてもらいました。

支援の関係性を理解する

知的障がいや自閉症の人との関わりを通して「支援とはなにか」を考えさせられます。「支援する」という行為は、支援する側とされる側の二者以上の関係が前提条件となります。この両者の間には「力の関係」があると考えています。支援者は支援をするか否かを選択できますが、利用者はその状況から自らの意思で脱することはできません。支援者には「選択肢」があり、利用者には「選択肢」がないのです。つまり「選択肢」の有無によって両者が対等になることは決してなく「力の関係」が存在することになると考えられます。もう一つ両者の関係を考えてみたいと思います。「利用者」は支援者にとっては義務（職務）を果たすべき「対象」です。支援者は利用者の問題行動など「ネガティブ」な側面に介入せざるを得ません。“させてはいけない”という気持ちは「責任」から生じます。“させてはいけない”を「管理」する必要もあるでしょう。“させてはいけない”を力ずくで「抑圧」しなければならないこともあるかもしれない。“させてはいけない”への介入だけではなく支援者のペースで支援することは「支配」になるかもしれません。つまり「支援」と「管理」「抑圧」「支配」は表裏一体であり、このことを支援者は自覚する必要があります。

私はより良い支援を実現するためには、①「力の関係」を自覚すること、②利用者のペースに合わせること、③「よかった」条件を再現すること、だと考えます。社会福祉における支援は、利用者の生活の良い状況をつかみ、それを再現することだと考えています。支援における主語は「利用者」です。「利用者が○○することを支援者が支える」という視点が利用者主体であり、より良い支援に繋がる一歩なのではないでしょうか。